

ジェンダーと言語を通じて見える日本社会とアイデンティティの複雑性 The Complexity of Japanese Society and Identity Through the Lens of Gender and Language

宮崎 あゆみ

私は、現在まで一貫して、言語を通じたジェンダー／セクシュアリティのアイデンティティ構築過程について、主にエスノグラフィ、参与観察およびインタビューなどの質的方法を用いて、言語人類学、社会言語学、社会学などの領域にまたがる学際的な研究を行ってきました。日本語は人称代名詞、語尾、語彙、イントネーションなど多岐に渡ってジェンダー化しています。言語にジェンダーが組み込まれているという特徴は、ジェンダーがどのように社会やアイデンティティを構築するかを読み解くために、有効な分析ツールを与えてくれます。例えば、ジェンダー言語研究では、女性が女性語を使うように期待されることで、女性のアイデンティティの表現を狭め、女性の社会的な地位達成のプロセスを困難にしているという知見も出されています。

私のジェンダー言語研究の一例として、ジェンダー一人称に光を当てて行った日本の中学校での長期のエスノグラフィがあります。日本の中学生たちは、学校の日常実践を通じて伝えられるジェンダー言語規範と交渉し、様々な人間関係や社会的文脈と折り合いをつけながら、アイデンティティを構築していました。例えば、女子生徒たちは、ジェンダー言語イデオロギーに対抗して「ボク」や「オレ」などのいわゆる「男性語」や創造的に作り出した中性語や非人称詞を一人称として使用し、文脈や関係性によって巧みに使い分けながら、既存のジェンダー言語規範をずらしていました。男子生徒たちは、望ましい男性性と結びつく「強いオレ」とスティグマを付与された「弱いボク」を誰が使うべきかを巡って、クラスでの力関係を交渉していました。

もう一つの例として、大学の女装コンテストや女装カフェ、異性装ソーシャルメディアなどをフィールドに行っている、ジェンダー規範を超えた多様なジェンダー／セクシュアリティ表現を行う若者たちの調査があります。超ジェンダー規範実践を行う若者たちは、日常およびメディア上でイメージや言語を創造的に構築しており、その実践を基に、女性性と男性性の境界を超えたダイナミックなアイデンティティを築いていました。

さらに、発達障がいの子どもの持つ母親たちが、社会的プレッシャーと闘いながら、どのように自己を取りもどす言説を構築するかに関するインタビュー調査、および女子刑務所において、女性受刑者たちがどのように言語化を通じて、自己や身体感覚を取り戻していくかに関する質的研究分析なども行っています。

このような研究を通じて、私たちと社会との複雑な関係を読み解き、私たちが社会規範に挑み、変革していく可能性を探っていきたいと思っています。また、私は海外で大学院教育を受け、国際的に研究活動を行う中で、英語圏の研究が理論を作り、非英語圏の研究がそれを応用するという非対称な権力図に直面してきました。日本でのジェンダー言語研究を通じて、少しでもこの不均衡を塗り替えていく貢献ができればと思っています。

(みやざき あゆみ 日本女子大学学術研究員)